



Title	テニソンと海
Author(s)	小野, 慶子
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 119-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テニソンと海

小野慶子

テニソンは生涯を通じて海を愛し、ケンブリッジ時代には、「自分はど
ういうわけか地水火風の中で水を最も好む」と語り、また「とにかく水は
僕の一番好きなものだ」と言っていた。彼の詩の中には海の描写が多く、
“Sea Poet”とも言われたが、テニソンに限らず古代から現代に至るまで
海は度々文学の中に登場してくる。ロマン派の時代を考えてみても、コウ
ルリッジの“The Ancient Mariner”, バイロンの *Child Harold's Pilgrimage*
などの作品があり、W. H. Auden はその著書 *The Enchafed Flood* の中で
ロマン主義の海について論じている。テニソンはロマン派の影を色濃く残
しながらヴィクトリア朝詩人として生きたが、テニソンのいわゆる Sea
Poems について、年代を追いながら主な作品の海のイメージを考えてみ
たい。

ごく初期の1830年に書かれた“The Merman”とその対になっている
“The Mermaid”は、共に海の底の世界を夢見るような調子で描いた作品
である。

merman は、海の中で人魚の乙女を追いかけて戯れることを歌い、そ
の世界は次のように描かれている。

... the pale-green sea-groves straight and high

“The Merman”, II. 14

Under the hollow-hung ocean green!

Soft are the moss-beds under the sea;

Ibid., III. 15-16

柔かい水草の上に身を横たえる merman の世界は、甘い悦楽に満ちてい
る。

海の底へと誘いこむような mermaid の歌は“Low adown, low adown”

を繰り返し、彼女の住む世界も merman の世界と似ている。

In the purple twilights under the sea;
In the branching jaspers under the sea;
In the hueless mosses under the sea

“The Mermaid”, III. 14, 17, 19

両方とも海は甘く幻想的で倦怠的でもある。御伽の国を歌ったようなこの二つの詩は現実の世界から離れており、日常の煩わしいことから遠ざかって空想の世界に遊ぶテニソンの姿を想像することができる。

1832年詩集に収められた“*The Lotos-Eaters*”はホーマーの *The Odyssey* の中から題材がとられており、lotos-land に上陸した水夫たちは蓮の実に酔いしれて故郷に帰ることを忘れてしまう。海辺に寝そべて悦楽に酔うこの水夫たちを、D. Bush は、ギリシャ時代のごつごつして頑丈な体つきの食べ物に飢えた荒っぽい水夫ではなく、自然をデリケートに観察し時代の倦怠を分析する大学出の詩人である¹⁾と述べているが、テニソンはこの水夫たちを通して現実から逃れて日々の苦悩を忘れて安逸に過ごしたいという逃避的な感情を歌っている。

lotos の実のなるこの島には楽園のイメージがあり、Auden の「ひそやかな愉悅に満ちた無心の楽園に対する同様の郷愁は、すべてのロマン主義者に共通するものである」²⁾という言葉を考えあわせてみると、ここにロマン派の影響をみることができる。この島から眺める海は静かで物憂く、水夫たちを甘いまどろみへと誘う。

Most weary seemed the sea, weary the oar,
Weary the wandering fields of barren foam

“*The Lotos-Eaters*”, 41-42

水夫たちは、危険な海に乗り出していくことに憎しみさえ覚える。

Hateful is the dark-blue sea
Death is the end of life; ah, why
Should life all labour be?
... Is there any peace

In ever clinging up the climbing wave?

“The Lotos-Eaters”, Choric Song IV. 1-4 & 11-12

そして岸辺でただ波の音を聞きながら海を眺めているだけでいいと思う。

Only to hear and see the far-off sparkling brine,

Only to hear were sweet, stretch'd out beneath the pine.

Ibid., VII. 11-12

この気怠い霧囲気は最後まで続き、水夫は

... we will not wander more.

Surely, surely slumber is more sweet than toil, the shore

Than labour in the ocean, and rowing with the oar.

Ibid., VIII. 42-44 3)

と歌って詩は終わる。

この詩の中には深刻さは感じられず、若者にありがちな甘ったるい厭世観を歌っただけのようにも思える。

次に、先の“*The Lotos-Eaters*”とよく比較される対照的な詩“*Ulysses*”について考えてみると、この詩もやはり同じく *The Odyssey* からその題材を得ているが、ユリシーズの行動はむしろダンテの *The Divine Comedy* に由来していると一般に指摘されている。1833年に親友ハラムが急死し、その後間もなくして書かれたこの作品に対してテニソンは、“*Ulysses*, was written soon after Arthur Hallam’s death, and gave my feeling about the need of going forward, and braving the struggle of life ...” 4) と語ったという。友を失なった悲しみを克服して人生を生きぬこうとする積極的な態度を歌ったものであり、“*The Lotos-Eaters*”の逃避的態度との著しいコントラストは詩人の持つ *am-bivalence* から来るものであると考えられているが、その一因として、“*Ulysses*”には詩人として、また社会の一員としての強い自覚と使命感が織り込まれているということがある。上に挙げたテニソン自身のコメントに対して、W. W. Robson は、個人の *private* な悲しみと責任ある社会人としての意識が接合している 5) と述べている。

老将ユリシーズの夕暮れの出発の場面は、

The lights begin to twinkle from the rocks:
The long day wanes: the slow moon climbs: the deep
Moans round with many voices.

“Ulysses”, 54-56

と描かれており、テニソンは海を擬人化して波の音を声にととえているが、その声はユリシーズの心を活気づけ励ましているかのようである。そしてユリシーズは部下たちに向かって次のように力強く呼びかける。

Push off, and sitting well in order smite
The sounding furrow: for my purpose holds
To sail beyond the sunset, and the baths
Of all the western star, until I die.

Ibid., 58-61

老いてなお新たな冒険を求めて未知の国へと旅立っていくユリシーズは生に執着しており、“I will drink life to the lees” (“Ulysses”, 6-7) と語るが、ここで死に対すする考え方を見てみると、ユリシーズは、

Death closes all, but something ere the end,
Some work of noble note, may yet be done,

Ibid., 51-52

と述べており、死の先には何も見ていないかのようである。波に吞まれて沈むかもしれない、或は幸せの島に辿り着けるかもしれないが、とにかく日の沈む向こうの果てまでも舟を押し進めていこうとしており、あくまで現世での何かを求め得ようとしている。E. J. Chiason もその “Ulysses” 論の中で、ユリシーズは *immortality* には全く興味がなく拒絶さえている⁶⁾と述べており、この詩には信仰が感じられず、死から目を背けているかのように見えるユリシーズの目の前には新しい船出があるだけで魂の救いはない。先に見た “The Lotos-Eaters” の中にも “Death is the end of life” (Choric Song IV. 2) という言葉があり、こちらの方は、“ah, why / Should life all labour be?” と続き、ユリシーズとは反対の人生態度を

表わしているのではあるが、死ぬことで何もかも終わってしまうというところで一致している。

一方では楽園の島に辿り着いて極楽のような暮らしに我を忘れることを歌い、他方では陸で休むことをせずに最後まで進み続けようとすることを歌っているが、海のイメージもそれに合わせて眠気を誘う穏やかなさざ波であったり志気を上げるような騒がしい波立ちであったりして詩の雰囲気を持ち上げるのに役立っている。そして海は楽園の島をとり囲む甘い岩として、また未知の世界との間に横たわるものとしての役割を与えられているが、内面にまでは迫ってこない。現世の快樂に酔いしれたいと思うテニソンも、友を失くした悲しみから早く立ち直って強く人生を歩もうと決心するテニソンも、その眼は専ら現実世界に向けられており、根本的な魂の安らぎはまだ見出してはいない。

1834年の春作られた“Break, Break, Break”は、岩に当たっては砕ける波の動きを見ながらハラムのことを思って嘆き悲しんだ詩であるが、強い社会意識をまとっている“Ulysses”に比べて、テニソンは短い行数の中で自分の悲しみを卒直に歌っている。

Break, break, break,
 On thy cold gray stones, O Sea!
 And I would that my tongue could utter
 The thoughts that arise in me.

O well for the fisherman's boy,
 That he shouts with his sister at play!
 O well for the sailor lad,
 That he sings in his boat on the bay!

And the stately ships go on
 To their haven under the hill;
 But O for the touch of a vanish'd hand,
 And the sound of a voice that is still!

Break, break, break,
 At the foot of thy crags, O Sea!
 But the tender grace of a day that is dead
 Will never come back to me.

悲しみに身を任せるテニソンは心の持って行き場もなく、“Break, break, break”と波に向かって叫ぶ。この荒れる海はテニソンの嘆き狂う胸の内に同化しており、その風景はそのまま彼の心情を表わしていると言える。このように自然を客観的に描写するだけに止まらず、その中に作者の感情を移入した心象風景として描くことはロマン派の時代に盛んに行なわれ、また G. Bachelard も「怒れる元素の生と不幸な意識の生との間には照応が存在する」⁷⁾と述べている。

寄せては返し止むことのない波の永遠のエネルギーに比べると人間の生命はあまりにあっけなく終わってしまう。思いもかけなかった友の突然の死はテニソンに人の生のはかなさを思い知らせるのに充分であった。二連に出てくる少年も青年も死の悲しみなどまるで知らないかのように無邪気に陽気にこの世の生を楽しんでいる。その声を聞いてテニソンは失なわれた友の手の暖みともう語ることもない声を思い起こし、その楽しげな姿を羨ましく思う。愛する人の死の悲しみに浸るテニソンの心には少しの安らぎもない。

テニソンはここまでもまた海を擬人化しており、今度は“O Sea!”と海に向かって呼びかける。自然を擬人化して呼びかけるということはロマン派以降の英詩の特色でもあるが、“Ulysses”の時はただ目の前で立ち騒いでいただけの海にこうして呼びかけることによってテニソンは海の内面に一歩近づいたかのように見える。が今はまだ海は激しい力をぶつけるだけで魂を救ってはくれない。

1850年に出版された *In Memoriam* は、ハラムを失なった時の嘆きから立ち直って遂には平安を見出すという詩人の魂の遍歴を折に触れて歌ったものである。初めは絶望に沈むばかりで信仰にも疑惑を抱いたテニソンで

あったが immortality を信じることによって友の靈魂不滅を確信するに至り、そこで初めて自分の魂も安堵を見出す。

この詩は悲痛の場面から始まるのであるが、亡友の遺骨を乗せた船はイタリア（実際はオーストリア）を出発してイギリスへと戻ってくる。テニソンはその航海が友の眠りを脅かすことなく順調に運ぶことを願って止まない。というのは、友が波にさらわれることなく大地の中に葬られることを願っているからでもある。

... sweeter seems

To rest beneath the clover sod,
That takes the sunshine and the rains,
Or where the kneeling hamlet drains
The chalice of the grapes of God

In Memoriam, X. 12-16

そして心配のあまりテニソンの魂は体を抜け出して遠くハラムを乗せた船のいる南の海へと飛んでいき、しばらく船の上に止まった後にまた引き返す。（*In Memoriam* XII）このように、友の遺体を海が奪い取ってしまわないようにと祈るテニソンの心は揺れ動く。

靈魂についていろいろと思案を巡らせ、魂の永遠を信じるようになった時テニソンは死や疑惑が波を越えた向うへ飛び去っていくようにと願う。

... till Doubt and Death,

Ill brethren, let the fancy fly
From belt to belt of crimson seas
On leagues of odour streaming far,
To where in yonder orient star
A hundred spirits whisper 'Peace'

In Memoriam, LXXXVI. 11-16

ここで彼は海の彼方に平安を見出して 'Peace' という言葉を口にする。

海はテニソンに慰さめを与えてくれるようになり、故園を去る前夜に見た夢の中では海は永遠の世界となっている。テニソンは大海に流れ注ぐ河のほとりにおり、友の霊が形を取って現われた時に海からの使者が来て彼

を小舟に乗せて河を下っていく。やがて大海に出ると、船を乗り換えて、巨大な姿になった亡友と一緒に船出していく。(In Memoriam CIII) ユリシーズのような海の向うに何かを求めての旅立ちとは違って、海そのものに限りない安らぎを感じているかのようである。神の摂理を信じることによって初めて魂が救われ、友の靈魂の不滅を確信できたテニソンは天国で再び友と会えることを楽しみに思い、以後は深い信仰に支えられて生きていくようになる。それと共に彼は海の永遠の中に神のイメージと重なるものを見るようになる。

1861年から62年にかけて書かれた“Enock Arden”の中では海と神がはっきりと重なっている。イノックは、船出の前に残していく妻に向かって次のように言う。“... the sea is His, / The sea is His: He made it!” (“Enock Arden”, 225-226) この‘His’は God を指しており、海は神の造ったものであるのだから櫓を意のままに操るのは神の御手であるとイノックは考え、神の決めた運命に身を委ねる。イノックの乗った船は南の海で嵐に遭って沈み、イノックは孤島に漂着して長い時を送る。やっとの思いで故郷に帰ってみれば、妻は他の男と結婚しておりイノックの行き場所はない。妻の前に姿を現わすこともせず、ひっそりと死を迎えるイノックに海からの呼び声がかかる。“There came so loud a calling of the sea.” (Ibid., 909) そしてイノックは“A sail! a sail!”と叫びながら死んでゆき、その魂は彼岸に向けて最後の船出をする。生きている間に死よりも辛い苦しみを味わったイノックの魂は、神の御元に迎えられて救われる。

次に、1869年に作られた“The Coming of Arthur”では、海が生まれてくる前の世界と死後の世界とを同時に表わしている。

‘Sun, rain, and sun! and where is he who knows?
From the great deep to the great deep he goes.’

“The Coming of Arthur”, 410-411

また同時期に書かれた“The Passing of Arthur”の終わりにも、“From the great deep to the great deep he goes.” (line 435) と同じ言葉が出て

くる⁸⁾。テニソンはアーサー王に友ハラムの姿を重ねていると言われており、アーサー王即ちハラムは great deep からやって来てまた great deep へと帰っていくのであって、魂に死はなくただ生まれてきた所へ戻っていくだけなのだと信じることはテニソンに大きな慰さめをもたらしている。

そうして年を重ねたテニソンはやがて自分の死の近づいてきたことを思うようになる。晩年になって書かれた“Merlin and the Gleam” (1889年作) は、老魔術師マーリンの回想をテーマにしたものであるが、テニソンはマーリンの口を借りて自分の詩人としての人生を振り返っている。テニソンが自ら“the higher poetic imagination”⁹⁾と定義した Gleam に導びかれてマーリンはとうとう陸の果てまで来る。現世と来世を隔てる境界でもある岸辺に来たマーリンに残されているのは喜んで死ぬことだけである。

And so to the land's
Last limit I came ——
And can no longer,
But die rejoicing,

“Merlin and the Gleam”, VIII. 15-18

これから先もずっと Gleam を追っていかこうとするマーリンは岸に行んで海を眺める。

There on the border
Of boundless ocean
Ibid., 22-23

無限の深さを持つ海の中に永遠を見るマーリンは、ためらうことなくそのまま Gleam の後を追って進んで行こうとする。その先に目ざす目的地があるわけではなく、唯死が待っているだけであることがわかっていながらマーリンの心は穏やかである。これは死後も引き続き Gleam の後をついていけることを信じて疑わないからであり、魂の不滅を信じる深い信仰に根ざしている。

この詩の約二ヶ月後に書かれた“Crossing the Bar”はその続きを歌ったものとも言える。

CROSSING THE BAR

Sunset and evening star,
 And one clear call for me!
 And may there be no moaning of the bar,
 When I put out to sea,

But such a tide as moving seems asleep,
 Too full for sound and foam,
 When that which drew from out the boundless
 deep
 Turns again home.

Twilight and evening bell,
 And after that the dark!
 And may there be no sadness of farewell,
 When I embark;

For tho' from out our bourne of Time and Place
 The flood may bear me far,
 I hope to see my Pilot face to face
 When I have crost the bar.

これは1889年にテニソンがソレント河を越えてワイト島のフェリングフォードへ行った時の実際の船出の光景を歌ったものであるが、その中に死への旅立を象徴的に読みとることができる。星が瞬き始める夕暮れは人生の終わりを感じさせ、そこに清らかに響き渡る声は天からの呼び声のように聞こえる。*In Memoriam* では夢の中で聞かれた呼び出しの声も今は目覚めた耳にはっきりと届いてくる。自分の死が間近に迫ったことを思うテニソンは静かな気持ちで死を迎える心の準備をする。海に漕ぎ出して行く時船が砂州に当って軋むことのないようにと願う気持は、死への旅立に就く時に苦痛がないようにと祈る気持でもある。海に乗り出して行くことは彼の世に向けて旅立つことでもあり、越えなければならない bar は三途の川

を意味していると考えられる。今、目の前に広がる海は眠っているかのよう静かで音も波も立たない。そして boundless deep から生まれ出てきた魂はその故郷である海へと帰っていく。マーリンの姿を借りて boundless ocean の縁に立ったテニソンの魂は、ここから海に乗り出して行く。黄昏の中に夕方の鐘が鳴り、その後は暗闇となって死後の世界へと続く。船出の時に別れの悲しみがないようにと祈る気持には、此の世の人々との別れの時の悲しみが少ないようにと祈る気持が重なっている。時と空間を越えた所にまで波が自分を運び去ろうとも bar を越えた後は水先案内人の顔を間近に見ていたいという言葉の裏には、永遠の世界に入った後は神の顔をはっきりと見たいという願いが暗示されている。この Pilot についてテニソンは、“That Divine and Unseen Who is always guiding us”¹⁰⁾ と語っており、魂を導く神の姿を Pilot に準えている。

船出と死との関係は古い伝説の中にも見られ、死者と船を結びつけることは昔からあったようであるが、テニソンでは特に海と神が強く結びついており、ユンク的な水の中での再生のイメージよりはそのまま神の懷の中に包まれて安らかに眠りたい気持ちの方が勝っているように思われる。

死への旅立ちを象徴的に歌った例として、ボードレールの「悪の華」の最後に「旅」という詩がある。現実世界のどこへ行っても救いを得られなかったボードレールは最後の拠り所として死を考え、“おお死よ、老船長よ、時は来た！ 錨を上げよう！ この国には飽きた。おお死よ！ 船出しよう！”¹¹⁾と歌っている。地獄であろうが天国であろうが構わず深淵に飛び込んで未知の新しいものを捜し求めたいと言うボードレールは海の中で再生を期待している。ボードレールにとって海は意識の中の深淵を象徴しており、彼は海よりもむしろ想像力の中に無限を感じている。（“波のリズムにしたがって、限りない想いを限りある海の上に揺りながら行く”：「旅」I. 7-8)

船出に死を象徴したものとしてボードレールの詩を考えてみたが、ボードレールの海が意識の中に存在する混沌の世界として観念的な意味を持つ

ているのに対してテニソンは実在としての海そのものに永遠を感じている。都会を離れて暮らすことのなかったボードレールとは違ってテニソンは海岸の近くに育ち、実際に海を見ながら詩を作ることが多かった。そしてボードレールが自分の意識の中で海を見ているとは逆に、テニソンは海の中に自分の意識を引き入れている。

これまでテニソンの詩から海にまつわるものを幾つか取り上げて考えてみたが、自然をできるだけ忠実に描こうとしたテニソンは海の描写においても精緻を極めている。外在的自然の風景としても海は度々描かれているが、内面性が加わったものを考えてみると、初めのうちは海的美しさに見とれてその底に幻の国を空想で描き、また遙か遠くに樂園の島を夢見るだけであったテニソンは、現実の世界に返った時、海の向うに何かを求めようとするようになる。そして *In Memoriam* を通して信仰の内に救いを見出した時、海の永遠に神のイメージが重なってくる。最後に、海は魂の故郷であり、生まれた所へ帰っていくのだと信じて船出していくテニソンの魂は安らかさに満ちている。

テニソンが船乗りの spirit を持っていたことは息子ハラムが述べており (He loved the sea as much as any sailor, ... he felt in himself the spirit of the old Norsemen.)¹²⁾、また A. Brooke は、テニソンの海を愛する気持の中には海の覇者であるイギリスに対する愛国心が込められており、故国の一部として海を愛していたと指摘している¹³⁾。テニソンは例えば “The Revenge” においてスペインに負けまいとするイギリス人の心意気を表わし、“The Sailor Boy” では、陸に止まることができず、何かに駆り立てられるようにして海に乗り出して行く英国人の水夫魂を描いている。

このような国民的精神に根ざした愛国的な詩の中にテニソンのヴィクトリア朝的な社会意識を見ることができ、今まで検討してきたように、ロマン的魂を持つ詩人としてのテニソンは海に自分の思いを託しながら内面化してゆき、海の永遠の中で魂の平安を得るに至ったのである。

Notes

*本文中のテニソンの詩の引用は Poems and Plays (O. U. P.) による。

- 1) D. Bush: *Mythology and the Romantic Tradition* (Cambridge Mass; 1937, p. 207)
- 2) W. H. Auden: *The Enchafed Flood*, 沢崎順之介訳 (南雲堂, 1962, 947)
- 3) この部分の引用に限り *The Poems of Tennyson* ed., C. Ricks (Longmans, 1969) に拠る。
- 4) Hallam Tennyson: *Tennyson A Memoir* (Macmillan, 1924, Vol. I, p. 196)
- 5) W. W. Robson: *Critical Essays on the Poetry of Tennyson*, ed., J. Kiliham (Routledge, 1960, p. 156)
- 6) E. J. Chiason: *Ibid.*, p. 172
- 7) G. Bachelard: *L'Eau et les Rêves*
- 8) この作品は1842年に書かれた "Mort d' Arthur" をベースにして書かれているが、前の作品にはこの line は入っていない。
- 9) *Memoir*, Vol. II p. 366
- 100) *Ibid.*, p. 367
- 11) 「ボードレール詩集」 佐藤朔 訳 (旺文社, 1972, p. 218)
- 12) *Memoir*, Vol. I, p. 7
- 13) S. A. Brooke: *Tennyson; His Art and Relation to Modern Life* (Isbister, 1894, p. 385)